

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 池松辰男

本論文は、ヘーゲルの『エンチクロペディ』における主観的精神論の検討を通じて、精神における主体の在り方が成立する諸条件および諸問題を、ヘーゲルに即して、その主体の生成という観点から考察しようとするものである。

二部からなる本論文のうち第一部においては、第一章で主観的精神論におけるヘーゲルの問題提起の意味が、近代哲学史上の主体をめぐる課題一般との関連のもとに確認された後、第二章で主観的精神論の基本展開が俯瞰されている。第二部においてはこの俯瞰を受けて、より立ち入って主観的精神論の構造および思想上の意義が考察されている。第一章ではまず主観的精神論に見られる精神内部の没意識的な領域の問題が取り上げられ、発展史的観点から、この領域が晩年のヘーゲルにとって精神における主体性の開始点であるという意義を持つことが明らかにされている。第二章では身体と言語の問題が取り上げられ、近代哲学史および発展史的観点から、ヘーゲルの身体論の意義、基本特徴、および言語論との密接な関連が示されている。第三章ではまず以上の帰結を受けて主観的精神論内部の構造の持つ思想上の意義が示された後、さらに客観的精神論との関連に立ち入った考察がなされている。氏によれば、ヘーゲルにおいては身体や言語に見られる「習慣」が、件の没意識的な領域から自己意識的な主体を導くさいの条件となるのであるが、それはまた、近代市民社会の進行に伴う否定的帰結（人間の労働の機械による置き換え）の条件ともなる両義的なものであるという。第四章ではその一方で、ヘーゲルにおいて、件の没意識的な領域への精神の関与は歴史哲学において歴史を動かす歴史的個人の在り方（情熱）を決定するものともなっているという次第が、先行研究との対比のもとに文献学的小および発展史的な観点から示されている。

本論文は以上の考察に基づき、ヘーゲルにおける主体が従来そう見なされてきたようなたんに自己意識的・知性的な在り方のみに留まるものではなく、そのような在りようを可能にするものでありながら、自体としては非意識的・非知性的である契機をも含んで成立すること、ならびに、主体は自己を自己内在的に不断に新たに作る余地を含む開かれた次元である、という結論に至っている。

本論文は、先行研究では十分に焦点が当てられてこなかった主観的精神論を包括的に取り上げ、文献学的見地に即した着実な研究であり、個々の論点にはなお展開を要し、補完を必要とする部分も残しているとはいえ、一方ではヘーゲル研究の新たな礎を築き、他方で倫理学研究それ自体に対する、正統的な視角を提起するものである。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。